

様式については、絵、実物、音声、身振り、文字などそれぞれが手続きの上で媒介や補助になることや様式の変換の考え方についても触れられました。

さらに、多くの症例報告から、機能的操作、ふるいわけ、選択という概念、それをSTが教えるということ、初期の記号形式の学習、身振り・音声と受信・発信・模倣の関係、学習における示差性の重要性についてお話されていました。

最後に＜S-S法＞の形成と広がりについて、現時点で考えられるコミュニケーション・言語記号・働きかけについて提示され、働きかけでは発信が受信に先行する視点（1976年の語順の訓練が発端）も頂くことができました。

今回、小寺先生の45年にわたる臨床は、過去から現在まで膨大で詳細なデータをもとに分析、検証、開発され、数多くのSTへと拡大してきましたが、まだまだ研究



当日は会場に倉井成子先生もいらして下さいました。

テーマがあり、発展途上とのことでした。先生の臨床とケースに対する一貫した考え方、姿勢、意欲、情熱に圧倒され、感動し、叱咤激励、鼓舞された3時間でした。

＊小寺富子先生と倉井成子先生が「言語発達障害」の章を執筆された、東京言語聴覚士会編集の「言語聴覚士のアルバム～原点と未来を見つめて」が2021年6月に刊行されました。日本における言語聴覚領域創成期の記録です。ぜひお手にとってご覧ください。

【参加者の声】

- ◎ 小寺先生が苦勞されてきた軌跡を見せて頂くことで、自分はずっとずっと考えて臨床をしなくちゃいけないと思い知らされました。
- ◎ ＜S-S法＞だけでなく、改めて小児STの歴史を振りかえり、＜S-S法＞にさらに愛着を感じました。そして、当たり前前の理論になっているが、試行錯誤の時代がまだまだそこまで昔でない時代であり、今後も発展させていかなければいけないと感じました。
- ◎ 臨床家の基本は事実に忠実に、お子さんの行動を客観的に分析することだと思いました。方眼紙、手描きのグラフ、青焼きなど時代の変遷も興味深く拝聴しました。
- ◎ 2語文の理解には、動作絵を対象と手段に分解・合成することが役立つといったことが特に勉強になりました。「封筒を見せてハサミを持ってこれた」といったエピソード等から、保護者の方から日頃の様子などを聞き取って参考にすることも大切なのだと学びました。